

# 「ベトナムにおけるサポーティング産業の発展 と日本の知的協力」報告

松尾昌宏

去る3月8日、ベトナムのダナン大学経済学部キャンパスにおいて、本学産業研究所とダナン大学の共同シンポジウムが開催された。また、アメリカのタウソン大学からの参加もあって、貴重な意見交換の機会となった。以下にその報告を行いたい。

シンポジウムは午前午後に分かれて行われ、午前の部ではダナン大学、ダナン市、桜美林大学その他各界の人々の挨拶の後、ダナン大学レ・テ・ジョーイ教授および本学産業研究所所長の岩井教授の司会の下、筆者およびダナン大学のトロン・バ・タン教授の報告が行われた。さらに午後の部では、早稲田大学のラン・ヴァン・トウ教授および本学経営政策学部の井上隆一郎教授の司会の下、本学産業研究所準研究員のド・マン・ホーン氏、ダナン大学のレ・テ・ジョーイ教授、アメリカのタウソン大学のドナルド・コプカ助教授の報告が行われた(なお、グエン・タン・リエム教授は欠席された)。最後に、岩井教授とラン教授と井上教授より、コメントがなされた。各論文の内容については、産業研究所年報の方を、参照されたい。

シンポジウムを終えての印象であるが、井上教授によれば、昨年よりもベトナム側

(特にダナン市)のサポーティング産業に関する認識が、大きく高まっているとのことであった。その背景の一つには、南北ベトナムを結ぶハイヴァントンネルの開通や、インドシナ半島を東西に結ぶ回廊となるハイウェイの開通等による、ダナンの産業立地上の優位性が、飛躍的に高まることが挙げられる。これまで対ベトナム投資は南部ホーチミン(サイゴン)と首都ハノイに集中してきたが、今後は、これら両都市およびタイのバンコクのいずれからも1000キロ以内の中間に位置するダナンが、いわば「インドシナのハブ」としての投資優位を高めていくことが予想される。実際ダナンは人口約2億2000万を抱えるインドシナ半島において日本や東アジアに最も近い部分に位置し、潜在的には日本にとってのいわば「インドシナの表玄関」となる可能性を秘めている。既にダナン市では、これを見越して東京に事務所を設置するなど、日本企業の誘致に動き始めている。

他方でダナンの現状は、かなりお寒い状況にある。例えばダナンにはいまだに日本からの直行便が無く、我々の入国時も出国時も、ホーチミン経由かハノイ経由であった。さらに、シンポジウムの翌々日には、ダナン市内の工業ゾーンを見学した

が、ゾーン内に進出している企業はまだ少なく、土地はガラガラの状況であった。さらにゾーン内で訪ねたバス工場は、閑散とし、プレス機などの設備機械はほとんど稼働していない状況であった。なんでもバスの年産台数は200台とかで、主要部品のほとんども、中国などからの輸入に頼っているとのことであった。これでは生産コスト高は間違いなく、自動車産業を見る限りは、サポーター産業の育成などは、現時点では夢のまた夢に思われた。恐らく今後の発展方向は、国内市場をテコとしたものは難しく、最初は領域を絞って低賃金を活かした単純加工と再輸出を目的とした大量生産部門から手掛けていくのが妥当であり、そのための迅速な政策的支援が必要であろう。ただし、ベトナムのオートバイ需要は世界有数の規模にあり、ここから機械工業やサポーター産業が発展する余地はあることは、指摘しておく。

また、産研通信の先号でも指摘したことであるが、ダナンの人口は現在実質約130万、ベトナムの所得が日本の所得水準の80分の1であることを考えると、日本の1万5000人規模の都市と同じくらいの経済規模である。地方に住んだ経験のある方ならお分かりのように、こうした都市規模では、市場規模も狭く、それゆえ物流の効率化は難しく、流通の量販店や、巨大スーパーの進出は困難である。実際ダナンでは、こうした店はほとんど存在しない一方で、町の電気屋、町の各種売店など、中小の小売業が、店を連ねていた。こうした店舗形態は、筆者が小さい頃には、日本にも数多く存在していたが、日本では、1990年代の規制緩和以降衰退し、ヤマダデンキや本屋のジュンク堂に代表される「カテゴリー・キラー」と言われる大規模専

門店舗、巨大スーパーやコンビニなどに取って替わられていく。その背景には、日本の市場規模の大きさが大きく関与しているものと考えられる。その点で、産研通信の先号に書いたことを、実際に現地を確認することができた。首都ハノイでは、少数ながら、こうした大規模スーパーの進出が始まっていたが、それでもまだまだごく一部のことである。恐らく機械工業やサポーター産業の進出についても、同じようなことが言えるのであろう。

他方で、この国の可能性について、もう一つ印象に残ったのは、ベトナム国民の規律正しさであった。実際、ベトナムでは、タイやマレーシアで見られたようなボッタクリらしいボッタクリを目にすることもなく、怪しげな人物から声を掛けられたり、身の危険を感じることも、ほとんどなかった(もっともホーチミン(サイゴン)の治安は遙かに悪いそうであるが...)。首都ハノイの町並みは、バンコクほど近代的ではないが、他方で極度に衛生状態が悪かったり、居住環境の悪い地区を目にすることもなく、整然として美しさを感じさせた。さらにベトナム料理は派手さこそないが、いずれもあっさりとして非常に美味しく、文化水準の高さを感じさせた。一体どうしてこの国が他の東南アジア主要国より遙かに所得が低いのかと、やや不思議に思われると同時に、この国が社会主義時代の遅れを取り戻し、タイやマレーシアに追いつくのも、時間の問題と思われた。

他方で閉口したのが、空港での手続きの遅さ、サービスの悪さに象徴される、官僚主義と規制である。入国時と出国時の審査では、書類の不備があったのかと、冷や汗をかいた。現場でやっている人は職務に忠実にやっているのであろうが、シス

テムに問題があるように思われた。徐々に改善されているとは言え、その速度は遅く、周辺国との競争のなかで、こうした問題は、企業の進出にもかなり大きなマイナスの影響を与えているようである。実際、井上教授の手配で実現した、ハノイのジェット口事務所におけるインタビュー調査でも、「ベトナムだけを見ていると、可能性は大きいように感じられるが、周辺国、特に中国と比べてみると、ベトナムの動きはいかにも遅く、今後が危ぶまれる」とのことであった。

しかし、こうした問題はあるにせよ、ハノイでの商業活動は活気に溢れ、社会主義時代を感じさせるものは、ほとんど何もなかった。最終日には、日本でのおみやげにと街に買い物に出かけたが、特に繊維製品などが安く、あの人にもこの人にもと、あれこれ買っているうちに、時間がなくなり、結局ハノイ大聖堂とホアロー収容所を見そびれてしまった。

前回の産研通信で筆者は、観光名所より買い物優先という、産業研究所のI所長のことを冷やかしたりしたが、帰国後のミーティングでは、逆にI所長から、「ああいう時って安くてついつい買ってしまうんですね～っ！、私の気持ち分かったでしょ！」と、反撃されてしまった。「松尾先生だって買い物じゃないですか！」と言わんばかりの、I所長の嬉しそうに勝ち誇った顔が印象的であった(なお、筆者はホーチミン廟、軍事博物館、ホアンキエム湖、民族学博物館、西湖、歴史博物館、ハノイタワー、文廟といった、その他のハノイ市内の大部分の主要観光名所を制覇したことを付記しておく)。

もっとも、このプロジェクトは今後も継続し、ダナン大学との交流も続きそうである。ハノイ大聖堂と、ホアロー収容所、さらには世界遺産となっているハロン湾については、またの機会にとっておくこととしよう。